
神の選択と抗う絆

鷹崎 弘

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

神の選択と抗う絆

【Nコード】

N7349Z

【作者名】

鷹崎 弘

【あらすじ】

突如隼の前に現れた死神テトラは隼に願った。

世界を救ってほしい、と。

そして、隼はテトラによって異世界に転移させられ、その世界で闘わされることとなった。

——化け物と、人間と、神と——

そんな変わり果てた日常の中で隼は、その世界での出会い、別れ、取り留めないことによって過去のトラウマから抜け出し、変わろう

とする。

そんな異世界ファンタジー。

00 要領の悪い神（前書き）

序章

要領の悪い神

00 要領の悪い神

その日、全てが変わった。

「うお！！！」

学校から帰宅中の、荒神隼は今日もいつも登下校に使っている道を自転車に乗って一人走っていた。

高校を入学し、隼がこの道を使うようになってから既に三ヶ月が経ち、この道ももう慣れた道と言ってもよい頃となった。

しかし、慣れとは恐ろしいものだった。

隼はいつも通り……いや、この道に慣れたせいもあるのか、注意力が散漫の状態で曲がり角を曲がった。

そして突如、隼の目の前には一台の車が現れた。

車もブレーキを掛けてはいるのだろうが、確実に当たるのが分かった。

隼は反射的に強く目を閉じ、身体を強張らせた。

「……生きてる？」

それが、恐る恐る目を開けた隼の第一声であった。
隼はいつの間にか寝転んでいる状態になっていた。

（車にひかれたけど、当たり所がよかったとか？）

そう考えながら隼は普段通りの力の入れ方で、まず上半身を持ち上げてみた。

「……痛く、ない？」

なぜか隼は全く痛みを感じることなく上半身を持ち上げることができた。

「たしかに、俺は車にひかれた……よな？」

もはや、車にひかれることすら半信半疑の状態であった。
特に、目を閉じていたため、車と衝突した瞬間を見えていないことと、痛みが全く無いことが隼の頭を余計に混乱させている。

「んー………ん？ あれ？ ここどこ？？」

隼は今まで気付かなかったのだが、ふと、辺りを眺めみると、そこは明らかに先程までいた道路ではなかった。

一番異なっていたことは、自分でも今までどうして気付かなかったのかと思うのだが、隼は今、自身の身体ですらも見えない程の暗闇の中にいたのだった。

「——やっと目が覚めたな。待ちくたびれたぞ。あと5分、目が覚めるのが遅かったら叩き起こすところだったぞ」

不意に、頭上から声が聞こえた。

その声の主は口調こそ男のようなところもあるが、声色は若い女

性のものだった。

「…………誰？」

当たり前の疑問が隼の口からこぼれた。そもそも隼はどうしてここににいるのか、自分でも分かってない。

「そうだな…………まあ、私のことはテトラとでも呼ぶといい。確認しておくが、お前の名は荒神隼で間違いないな？」

「え、ええ、そうですけど…………どうして俺の名前を？」

そもそもあなたはいつたい…………？」

彼女は素早く隼の意を汲み取って、こう話を続けた。

「おっと、呼び方なんてどうでもいいな。私は何者なのか、だな」

「…………そうです。あなたは何者なんですか？」

「私は…………そうだな…………お前達、人間に死神と呼ばれている存在、と言うところかな」

「…………え？」

隼は、何を馬鹿なことを言っているんだ、と思いついたが、それ以上に、言い方こそ雑だが、テトラは本気で言っているように感じられた。

「本気で言っています？」

「ああ、本気だとも」

テトラは一瞬たりとも間を空けることなく断言した。

「…………」

「…………」

「…………証拠を見せてもらえませんか？」

「まあ、よいが…………その前に堅つ苦しい話し方やめにしないか…………昔のことを忘れろとは言わないが、もう少し器用にできないかのか？」

「——っ!」

テトラのその言葉によって隼の頭の中に昔の記憶が蘇る。

そして、それが彼を覆いつくそうとする。

恐怖によって。

「すうー…はあー…」

隼は大きく深呼吸することによって、どうにか落ち着きを保てた。

「どうしてそのことを知っているのかは、分かりませんが、まず、証拠を見せてください」

「分かった。分かった。」

「……ふむ。さて、なにをすればお主に認めてもらえるのか…?」
「……」

しばしの沈黙。

そして、テトラが話します。

「よし!」

ならばここで人の理を越えた力を見せれば、認めてもらえるか?

「……分かりました。本当にそんなことができるのならば、認めましょう」

と呆れたように言ったものの、テトラのその自信に溢れた物言いが隼を不安にさせる。

「では、いくぞ」と、その前に隼、頭上をよく見ておけよ」

「わ、分かりました」

隼は、ごくり、と唾を飲み込む。

そして——

頭上から一筋の雷が隼に向かって、直撃してきた。

「——っ!」

当たり前だが、雷は光の速さを持つため、隼がその雷に気付いたのは直撃した後だった。

だが、それが自らに向かって落ちてきたことは認識できた。また隼の目は暗闇の中にいるせいで分かりにくい、その眩しさによって焦点が微妙に合っていない感覚があった。

「どうだい？ 信じてもらえたかな？」

呆然としている隼にテトラは尋ねた。

「え？ ああ……いや、少し待ってください！
俺は雷に当たったのでは！？」

隼は死んでいない。それどころか、痛みすら感じていなかった。だから、このような質問が出てきたのだ。

「ん？ ああ、今は雷ではないぞ。今はな——」

——「才能」と言う名の光だ——

「……は？」

目が覚めてから、驚くばかりの隼だが、驚くということがはなくなる気配は無かった。

それ以上にもはや聞いたことが間違いだったのでは、と思うようになっている。

「……分かりました。信じることにしましょう」

「助かる」

隼は何とも言い難い思いがあったのだが、一応はテトラのこと認めた。

いや、認めざるをえなかった

「それで？ その死に、が……！！」

隼はテトラを死神だと信じた後になって、ようやく思い出す。事故にあったことを。

「そう、か…俺は死んだってことですか……」

それなら完全に納得…とまではいかないが、わずかに納得できるところがある。

「魂の回収というものですか……」

「いや、違うが」

「えっ…!？」

「………」

テトラは当然の様に隼の発言を否定した。

隼は恥ずかしいことを真面目に言っただからだろうか、顔に熱を感じ、赤くなっているのが分かった。

また、テトラが少し面白がっている気がした。

「な、なら、何が目的なんですか？」

その質問に対してテトラは一拍おいて、真剣な声で話します。

「…私がお前を呼んだ訳は……隼……お前に世界を救ってほしい……」

隼は、もはや何に対して、どう驚べきなのか、自分でも分かっていない。

つい先程、意味の分からない力を見せつけられ、ありえない存在を認めさせられ、とうとう、隼自身に対しても理解できないことを求めてきた。

隼はもう何も言えなかった。

「理解しがたいのは分かる。だが、もはや時は一刻を争うのだ」

——私達にもお前にも。

「……え？俺にも？」

「そうだ。まず、私が言っている『世界』とはお前が思っているよ

うなものではない。」

隼は首を傾げた。

しかしテトラは仕方ない、と言う風に話を続ける。

「お前に分かりやすく言うならば、救ってほしいのは全ての過去、現在、未来。そして全ての平行世界だ」

テトラは真面目な口調で話している。

隼も意味は分かった。

だが、ただそれだけであつた。

「まず、お前にはある地に赴いてもらう必要がある」

「……その前に聞いてもいいですか？」

「なんだ？」

「あの、俺は死んだはずではないのですか？」

隼はテトラの言う『世界』は理解不能とし、一番気になっていたことを聞いた。

「ん？」

ああ、そうだな…そのことについても話さないとならないか…

ふむ、どこから話すべきか…」

隼の額から汗が流れる。緊張しているのだろう。

そして、テトラは再び口を開いた。

「よし、まずはどこに行ってももらうからかな。隼、お前には――」

――異世界に転移してもらう。

「……………」

「……………」

「……………」

「さて、その異世界とはな――」

「ちよっと待ってください!――!」

「まあ、黙っておれ。まずは私の話を全て聞け」

そのテトラの声は今までと異なり、相手に有無を言わさないものだった。

「……分かりました」

「よい。まず、その世界の名はこちらの世界の言語で言つと『始まりの世界』と言つところか。

そこはな、この世界で言う神話の世界なのだ。

いや、そもそもいくつかの神話はもともと、あちらの世界での実際の出来事だ。それが空間の歪みによってこの世界に投影され、伝わっていった。

そんな、お前達の世界ではありえない闘いの世界こそが『始まりの世界』というわけだ」

（………これはどう反応すればいいのだろうか？）

隼は黙っておくように言われたため、一人心中でそう思っていた。

「次にお前がそこに行かなければならない訳なのだが……

いや、その前にあちらの世界の現状を話そうか」

（何か深刻そうだな……）

テトラの声は最初に会話した時のものとは明らかに雰囲気は異なり、今は深刻そうに語っている。

「今、あちらの人間は神々と戦争をしている……いや、違うな……そう、神の干渉から逃れた、と言えば分かるか？」

（………分かりません……）

むしろ分かる人なんているのだろうか、とも思っていた。

「神はいる。その事を頭に入れて聞くがよい。

それで神って存在は世界の管理をしている。基本的に人間からの干渉は出来ないのだが、あちらの世界の人間は神を人間界に引きずりおろして……殺した」

(……それはどのくらい凄いことなんだ?)

「神はな、人間界だと本来の力の百分の一の力も出せない。人間も水中で走ることは難しいだろ？」

それと同じだ。神とて人間界では闘いにくい。おまけに人間は神を強制召喚させる際に、さらに百分の一の力しか出せなくする結果を張った。要は一万分の一の力も神は出せない。そして、殺された」
テトラ自身も死「神」のはずなのだが、同じ「神」が死んだことを全く気にしていないかの様に話した。

(……人間もやるなあ……)

それに対して隼は感心していたのだった。

「下級神が殺されるところまでは別に上位の神々は気にしていなかったのだが、その後、人間はとうとう中級神まで殺してしまった。そして上位の神々……上級神以上が人間を危険視し始めた。

だがな、神が自ら人間界に降りることは神々のシステム上問題があった。だから神は『人間』を使うことにした」

テトラは大事なこともスラリと、会話の流れで言った。

「は？」

それはどういうことですかっ!？」

今まで我慢していたが、とうとう隼は声を出してしまった。

しかし、テトラも特に気にする様子もなく話を続けた。

「他の世界の人間をあちらの世界に潜り込ませ、滅ぼさせるために、

だ。ただ、リスクも大きかった。世界を渡ることの成功率は一パーセント未満。

そして失敗したら魂は……消える……」

テトラは重そうに語るものの、隼には魂という物がよく分からなかったため、テトラに尋ねた。

「魂が消えると、どうなるのですか？」

「…一つの魂が消えることで数万の人間が…消える…」

「??」

待ってください。どうして魂一つで数万人もの人間が消えるのですか!？」

「…世界つてもものはな、神ですら幾つあるのか分からないだよ。

例えば神の上の神、その上の神、と可能性の話をしたらきりがないことがある。

同様にそれが積み重なり、私達ですら知らない世界がある可能性もある。そして魂は一人一つではない。世界を越えて繋がっているだからなんだ…」

「なら、どうして死神が俺に接触してきたんですか？」

一度話したら止まらない。だが、テトラも怒ることはなかった。

黙っていた意味はあったのだろうか、とさえ思えた。

そして、今の隼の発言。気がつくとう隼は何気なくテトラのことを死神と言っていた。

隼はいつの間にか疑いが完全に消え、テトラを死神と認識したようだった。

「うむ。それでなその魂の消滅のせいで世界のシステムが壊れ、世

界が滅んだ。それも既に数百は越えている」

「えっと、その神々のシステムとか世界のシステムって——」

——何なんですか？

そう聞こうとしたが、できなかった。

テトラの声が隼の声を遮る。

なぜなら、

「なっ——！！」

くそっ！もう時間が無い。今すぐあちらに送るぞ——！」

急にテトラが焦りはじめたからだ。

「え？ えっ！？ それって魂が消え——」

「大丈夫だ。そのための『才能』をお前に与えておる。あちらの言語も頭の中に突っ込んである。だから頼むぞ。

世界を救ってくれ」

「ちよっと待——」

そして隼は意識を失った。

…ただ、彼には意識を失う前に言いたいことが一つあった。

だから、結局何をすればいいのですかっ！！？

そう…テトラは隼に「世界を救ってくれ」とは言ったものの、何

をどうすればよいのか、という点については一切教えていなかったのだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7349z/>

神の選択と抗う絆

2011年12月24日13時01分発行